



## 優秀賞

書評 ヴィクトール作、池田香代子訳『夜と霧』（みすず書房 2002年）  
（生田開架 946/7//S）

理工学研究科博士前期課程1年 高野真志

戦争ドラマでよく見るような劇的展開などない。あるのは果てしなく続く無益な生活のみだ。淡々と記述される強制収容所の光景を通して、我々は人間の本質をありありと目撃することであろう。

本書『夜と霧』は第2次世界大戦時、ナチスドイツによって強制収容所に入れられた人々の生活をつづる「体験記」である。山積みされた死体、ガス室での凄惨な死などの地獄を見るような描写はこの本の中にはない。本書の中にあるのは「おびただしい小さな苦しみ」だ。自らも被収容者であったヴィクトール・E・フランクルが描く収容所の情景は、巨視的な観点では認識されない一人一人の生活をまざまざと提示する。内部にいた者にしか感じとることのできない、人が人でなくなる過程が生々しく描き出される。

こういう書き方をすると、本書には惨たらしいことしか描かれていないように思われるかもしれない。しかし、本書の目的はあくまでも心理的探究であって、随所にみられる客観的な考察は読むものを感心させる。心理学者と被収容者という二つの立場に立つことによって、他の者には知ることのできない、収容所の人々の深層心理を事細かに暴き出す。人間が人生のどん底まで落ちた時、彼らは果たして何を希望に生きるのか。現実には、被収容者であった彼は果たして何を糧に生き残ったのか。理不尽なことだらけの収容所生活の中で、被収容者の心理はどのようなであったかを、実体験を交えて描写する彼の文章はとても力強い。筆舌に尽くしがたいような体験を、ためらうことなく記述する彼の学者としての姿勢には、背筋を伸ばさずにはいられない。

本書で書かれている情景は、平和な現代に住む我々にとっては想像すらできないことである。しかし、だからと言って必ずしも我々に無縁なこととは思えない。強制的な死への不安を持たない現代社会に生きる者といえども、生きることへの渴望は彼ら被収容者と同じはずである。本書を通じて、自分の生きるという活動を改めて見直すいい機会が持てたように思う。